■海外研究事情

世界の労働関係研究所・資料館・図書館（10）

——スウェーデンの労働資料館と労働組合中央組織

五十嵐　仁

はじめに

フィンランドのタンペレでのIALHI大会に出席した後，私は再び列車に乗ってヘルシンキに戻った。そこからスウェーデンのストックホルムまで船で向かうためだ。シリア・ラインというベーリング海をクルーズする豪華客船である。この客船は13階もあり，大きなホテルがそのまま海上を滑っていくようなものだった。

こうして，2001年９月10日朝，ストックホルムに到着した。翌11日，アメリカで同時多発テロが発生した。この日を，私はストックホルムで迎えたのである。

ストックホルムでの宿は，メーラレン湖という湖に浮かぶ，小さな赤い船だった。同じ船でもヘルシンキからストックホルムまで乗ってきた「動くホテル」とは大違いで，動かない16部屋のちっぽけなユースホステルである。

トイレやシャワーは共同で，船室にはベッドと小さな机があるだけだ。電話やコンセントなどはなくインターネットを繋ぐこともできない。もちろんテレビもなく，全くの情報過疎地帯であった。

スウェーデン労働運動資料・図書館の訪問

雨の音で目が覚めた。前日の夕方から再び降り始めた雨が激しくなっているようだ。ヨーロッパに来てから完全に晴れた日は一日しかない。日本でも，秋の長雨というのがあるが，ここスカンジナビア半島も季節の変わり目の長雨なのだろうか。

この雨の中，タクシーを拾って，スウェーデン労働運動資料・図書館The Archives and Library of the Swedish Labour Movement (1) に向かった。資料館の場所はすぐに見つかった。ストックホルム中央駅から北に少し行ったところで，窓に大きく表示が出ていたからだ。ここのスタッフからもらった名刺に付いていたAをデザインしたマークも，入り口に出ていた。

この資料・図書館は1902年設立だという。建物もそのときからのものなのだろうか。

約束の時間にいくと，受付の所で私を待っている人がいた。シュテラン・アンダーソンStellan Anderssonさんで，こちらのアーキヴィストだ。この人に事務所や書庫の中を案内していただき，話をうかがった。

事務所は主に２階で，１階に受付と閲覧室，地下１階と２階が書庫になっている。地下１階

(1)　スウェーデン労働運動資料・図書館の英語版HPについては，http://www.arbarkiv.nu/english.htmを参照。

スウェーデン労働運動資料・図書館

の書庫は主に労働関係図書，地下２階はその他の資料と分けられている。図書などは12万タイトル，うちブックレットやパンフは３万冊，定期刊行物は300で，資料の方が圧倒的に多いようだ。

しかし，ここにあるのは労働運動資料・図書館が所有する図書・資料のほんの一部で，他に３カ所も施設があるという。このうちの一カ所は，資料保存のための本格的な保存書庫で，現在建設中の労働関係研修施設の一部になるそうだ。

したがって，全体の規模は，ここの10倍にはなるだろうというから，大きなものだ。できるだけ幅広く網羅的に資料を集めたいと言っていたが，今のところ，スペースの悩みなどとは無縁のようだ。資金も，労働組合，政府，社会民主党から出ているという。羨ましい限りである。

資料は全て，同一規格のボックスに入っている。これは特別に注文したもので，一般に売られているわけではなく，縦は同じだが幅などは様々だ。

これらの図書・資料の目録化も進んでおり，現在ではカードレスになっている。コンピュータ画面で検索でき，それはスウェーデンの他の労働関係文書館・資料館ともネットワークで結

ボックスに整理された資料

ばれている。オーデイオ，ビデオ関連資料やバッジ，写真などもたくさん所有している。テープやビデオは，利用しやすい形にダビングし直されているという。

下の写真で，アンダーソンさんが手にしているのはバッジのコレクションだ。メーデーのバッジは，最初から最近のものまで全部揃っていると言っていた。

私を案内してくれたアンダーソンさん

ここの部屋数は約25で，スタッフは約30人。他の施設にも２～３人のスタッフがいるというから，かなりの数になる。ほとんどが専任のスタッフだそうだ。

資料は労働組合関係だけでなく，社民党や共産党などの政党関係もあり，サンディカリストやアナーキストの資料もあるという。労働組合

では2500団体，政党は2000組織，個人約500人から寄贈を受けているということだ。

閲覧者の資格は問わず，誰でも閲覧できる。中学生や高校生も授業の一環として訪れることがある。研究者ばかりではない広がりがあるということで，この辺は大原研究所としても参考になるところではないだろうか。

特に，中学校や高校などでの社会科教育の一環として研究所を訪問してもらい，過去の運動の文書や資料に接してもらうことは，大変有意義なことではないかと思う。もちろん，その前に，大学の授業などで有効に生かしてもらうことの方が先決かもしれないが……。

最後に，翌日インタビューのために訪問する予定のLOの本部所在地について聞いた。すると，窓の外を指さして，「あそこですよ」。

「エッ」と聞き返すと，「窓から見えるあのビルがLOの本部です。入り口は，あの角を曲がったところです」と仰る。

驚いた。隣り合わせに建っていたわけだ。両者の関係の近さを象徴しているようだ。このような関係も，実際に来てみなければ分からない。

スウェーデン労働総同盟の訪問

９月12日の朝，目が覚めると，天窓のような小さな窓が明るくなっている。雨の音は聞こえず，代わりにチャポンチャポンという波の音が聞こえる。

天気が良さそうだ。ベッドから起きあがって小さな窓から外を見上げたら，青空が見えた。

今日は，スウェーデン労働総同盟（LO）(2)本部を訪問する予定だ。すでに昨日のうちに場所は分かっている。タクシーを拾って，見覚えのある場所に着いた。

LOの隣が市のコンファランス・センターで，その中にはこの地域のLO地方本部の事務所がある。その前は公園になっており，噴水がキラキラと朝日に輝いていた。

時間を見計らってLOの本部に向かう。明るい光の中で見ると，建物の立派さに改めて驚く。

スウェーデン労働総同盟本部

３角になっている角地に，辺りを睥睨するかのように建つシックな建物がLOの本部だ。時計の上の方の壁に大きくLOという文字があるのが分かるだろうか。

LOをデザイン化したドアのノブ

(2) スウェーデン労働総同盟の英語版HPについては，http://www.lo.se/english/index.htmを参照。

この中に入ろうとして，ドアのノブが奇妙な形をしているのに気が付いた。LOという文字をデザイン化したものだ。

来意を告げ，受付で電話してもらうと，間もなく今日のインタビューの相手であるアン・ソフィー・ハーマンソンAnn-Sofie Hermanssonさんが現れた。まだ若いお嬢さんだが，運営委員会の書記をされている。

執務室に通され，「コーヒーはどうですか」と聞かれた。「お願いします」と答えると，パンの上にレタスとハム，チーズが載ったものも持ってきてくれた。これは気が利く。朝食を食べていなかったので，遠慮なくいただいた。

ハーマンソン書記

スウェーデンの労働経済情勢

インタビューの最初に，この建物について聞いた。とても立派な建物だけど，初めから労働組合の本部として建てられたのかどうかと聞いたわけだ。

彼女は嬉しそうな顔をして，これは大変由緒ある（と言ったと思う）建物で，LOが買い取って本部にしたものだ。確か，建物についてのパンフレットがあったはずだから，聞いてみようかという。

時間がないのでこの件は後回しにして，早速，スウェーデンの経済・労働情勢についてインタビューした。その概要を紹介することにしよう。

前回のフィンランド同様，スウェーデンも90年代の前半は国家財政が歳出超過になり，不況に陥った。しかし，94年に社会民主党が政権に復帰して以降，その政策的イニシアチブによって経済は好転し，一時８％もあった失業率は，現在では４％にまで半減したという。

この点で，輸出産業の業績回復やIT産業の成長などと共に，社民党の政策的イニシアチブが強調されたのが印象に残った。特に，失業者の教育に力を入れ，大学などでの再教育の拡大によって失業者を吸収し，あわせて技術教育などの機会を提供したというわけだ。

このような経済の好調さの中で労働組合への信頼感も増大し，組織率は増大傾向にある。ただでさえ高かった組織率は，特に女性の組織率の向上によって，現在では80%を越えている。

このときもらった資料によると，スウェーデン全体の労働組合組織率は81.9%になる。これはLOだけでなく，全ての労働組合を合計した組織率だ。

これを属性別に見ると，一番高いのが女性ブルーカラー労働者で87.2%，次いで女性ホワイトカラー労働者83.5%，男性ブルーカラー労働者82.6%，男性ホワイトカラー労働者75.2%の順になっている。男女別では，女性労働者の85%，男性労働者の79%が組合員だ[(3)]。

女性ではほとんどの人が，男性でもかなりの人が，労働組合に入っているということになる。まさに，労働組合社会と言って良いわけだが，それはスウェーデンだけでない。フィンランドやデンマークもそうだというから，驚きだ。

---

(3) The Swedish Trade Union Confederation, "The Rate of Trade Union Organisation in Sweden." 2001, p.1.

このような労働組合社会は，同時に高福祉社会でもある。高度の社会保障と安定した経済成長，失業率の低さによって特徴づけられる「スウェーデン・モデル」は，他の社会でもモデルになりうるのだろうか。

「福祉が充実すれば働かなくなるのではないか，という議論がありますが」と聞いた。すると，「スウェーデンでもそのような意見があります」と言いながら，人はお金のためにのみ働くのではないと説明された。

確かに，雇用の保障や高い収入は前提だが，しかし，労働の動機はそれだけでなく，働くこと自体の喜びも重要だというわけだ。そのような喜びが得られるような働き方をどう実現していくのか，つまり，労働の質が問われるということだろう。

彼女の回答はかなり抽象的なものだが，スウェーデン社会が日本社会よりもかなり先を進んでおり，抱えている課題や問題も異なっていることを感じさせられた。しかし，それはいずれ日本社会においても問題とされるべき課題ではあるだろう。

労働組合と政党との関係については，スウェーデンでは歴史的な経緯もあって，社会民主党との関係が特に深いという印象を持った。労働組合との関係がある政党としては，ほかに旧共産党（左翼党）と緑の党があるそうだが，共に支持率は10%位でフィンランドに似ている。

組合の中にはこれらの政党の支持者もいるが，それほど強力ではない。中央の運営委員会のメンバーは全員が社民党だそうだ。選挙では社民党候補者の応援もし，資金も出しているという。

この日もらった政党との関係を説明したパンフでは，「LOは，1889年に結成された社会民主党のイニシアチブの下，ブルーカラー労働組合組織のナショナルセンターとして1898年に創立された。LOの綱領の最初の版は，LOへの加入者は社会民主党にも加入しなければならないという条項を含んでいた」とある。しかしさすがに，この条項は「数年後に廃止された」そうだ(4)。

このような関係に比べればまだ緩いものの，それでもかつての日本の総評と社会党との関係を彷彿とさせる。しかし，それが成功しているという点では，逆の例だということになるのかもしれない。

これらの点については，彼女自身良く分からないようで，これ以上，詳しく聞くことはできなかった。将来の宿題ということにしたいと思う。

最後に，彼女が何故，労働組合のスタッフになったのか，その経緯を聞いた。すると面白い事実が分かった。

元々，彼女は日本でもよく知られている自動車会社ボルボに勤めていて，フォークリフトの運転手だったそうだ。新しい作業組織を導入し，「労働の人間化」の側面から注目を集めたウッデバラ工場である。

ここでたまたま，この作業組織の改革委員会に関与し，作業組織の改革に力を尽くしたものの，結局，これは成功しなかった。現場での企業主導による改革に限界を感じた彼女は，このような改革を労働組合の力で実現させようと会社を辞め，3年間大学で社会学を勉強し直した。大学を出て，金属労働組合の活動家となった後，首相府の秘書となり，96年からLO本部に書記として勤務するようになったという。

大変興味深い経歴だ。このウッデバラでの労働改革については，日本でも多くの研究者が注目し，大原研究所でも元所長の嶺学先生が著書

(4) The swedish Trade Union Confederation, "The Unions and The Party - a TEAM." 1988,p.1.

で紹介しておられる[5]。

その改革に関わった一人がここにいたわけだ。嶺先生なら，もっと詳しいインタビューを行ったところだろうが，私はこれについてはあまり詳しくない。残念ながら，この程度で終わってしまった。

アメリカでの同時多発テロ事件の発生

インタビューを終わって出口まで送っていただいた。別れ際，「ところで，アメリカは大変でしたね」と言われた。「アメリカですか？私は９月の始めにアメリカから来ましたけど，大変というのはどういうことですか？」

「エッ？　テレビを見ていないんですか？」「今泊まっているのはユースホステルで部屋にはテレビがありません。」

「ああ，それで知らないんですね？」「何かあったんですか？」

ハーマンソンさんは受付に行って，新聞を持ってきた。一面を広げて，「これをご覧なさい」。

そこには，爆発しているビルの写真が写っていた。ニューヨークの貿易センタービルの写真だという。「テロ事件で，爆破されました。」「エエッ？？」

ハーマンソンさんにお礼を言って急いでそこを離れ，新聞を買いに走った。近くには英字新聞はなく，店の親父はテレビを食い入るように見ている。画面には煙を上げているビルや負傷した人々の映像が映し出されていた。

別の店でやっと手に入れた『The Wall Street Journal Europe』を読んで，ようやく事態が飲み込めた。これは大変な事件が勃発したものだ。

新聞は，犠牲者のはっきりとした数は分からないものの，真珠湾の不意打ち攻撃で失われた2400人の人命を上回るだろうと報じている。しかも，今回は市民への攻撃だから心理的な影響はもっと大きなものになるだろうとの予測である。

この新聞を持って，ゆっくり読めるところを捜して歩いた。結局，国会の横にある広場の石段の所まで行き，陽の当たるところを見つけて，まさにむさぼるように読んだ。

驚いたことに，今回のテロは爆弾によるものではなく，ハイジャックされた飛行機による「神風型の激突」によるものだというではないか。しかも，その飛行機の中には，ボストンのローガン空港発のものが含まれている。

私の友人や知人で巻き込まれた人がいないか心配だ。あの何度も通ったローガン空港が，このような事件の舞台になるとは思いもよらなかった。

今回標的になった世界貿易センタービルは，ニューヨークに行ったときに前を通ったことがあるし，ペンタゴンには見学を申し込むためにその入り口まで行った。いずれもなじみのある場所だ。

今回のテロの目的や犯人像について，新聞は様々な推測を書いていた。「戦争を始めるには，連合国はまず敵を見つけなければならない」というのが，見出しの一つだった。これは，戦争の始まりだというわけだが，その「敵」が誰なのかは，まだ分からない。

すでに疑われているのがイスラム原理主義過激派のオサマ・ビンラディンという人物だ。従来からアメリカへのテロ攻撃を公言し，豊富な資金を使ってアフガニスタンで1000人ともいわ

---

(5)　嶺学『労働の人間化の展開過程－市場競争下の職場の民主主義』御茶の水書房，1995年。特に207頁以降参照。

れるテロ要員を養成している。

テロの拡大に備えて，アメリカ国内はもとより，ヨーロッパ各国にある米軍基地は厳戒態勢に入った。イギリス労働組合会議（TUC）の大会に出席するためブライトンに向かっていたブレア首相は，急遽，予定を変更してロンドンに戻り，事態の新たな展開に備えているという。

ほとんどテレビを見ることのできない私は，これ以上事態の推移には付いていくことができない。これから，事態はどのように展開するのだろうか。このとき，旅の前途に暗雲が漂うような漠然とした大きな不安を感じたのだった。

（以下，続く）

（いがらし・じん　法政大学大原社会問題研究所教授）

法律文化社　〒603-8053 京都市北区上賀茂岩ヶ垣内町71＊価格は本体(税別)
☎075(791)7131 FAX075(721)8400 http://www.hou-bun.co.jp/

現代日本の失業
［社会政策学会誌第10号］
社会政策学会編
A5判／278頁／2800円
〈共通論題〉現代日本の失業と不安定就業（伍賀一道）　世代対立としての失業問題（玄田有史）　職業能力開発からみた今後の雇用形態（八本憲夫）　「逆生産性交渉」の可能性（石田光男）
〈書評〉17本
〈投稿論文〉介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）におけるケア労働分業の現状と課題（中村義哉）　乖離する高齢者ニーズと介護保険制度（尾崎寛直）　小売業における処遇制度と労使関係（秀あや美）　社会党改革論争と労働組合（岡田一郎）　地域におけるホームレス支援策の構造（岡本祥浩）

都市失業問題への挑戦　玉井金五・松本淳編著　●2800円
◉自治体・行政の先進的取り組み　地域が求める雇用対策とは何か。政策の変遷をたどり、雇用・失業問題の本質に迫る。

ドイツ自治体の行財政改革　武田公子著　●4300円
◉分権化と経営主義化　分権化の潮流をふまえ、会計制度や社会扶助費など具体的な問題を素材に行財政再編の方向を考察。

イギリスの福祉行財政　山本　隆著　●6500円
◉政府間関係の視点　財源、権限、人員の面から政府・自治体間の内実を解明。中央の役割、民間の規制等から福祉改革を学ぶ。

介護保険見直しの争点　増田雅暢著　●2200円
◉政策過程からみえる今後の課題　家族介護の評価、施設体系など10の論点を挙げ対応策を示す。制度見直しの指針となる書。

介護保険運営における自治体の課題　佐藤　進著　●3000円
特徴的な介護保険の実践を行ってきた7市町村の運営実態を実証的に分析し課題を提示。筆者が足を運んで考察した研究成果。